

連合艦隊西進す 1

日独開戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

序章

9

第一章 落日の英本土

19

第二章 傲岸ごうがんなる国

47

第三章 海面下の獵犬りようけん

71

第四章 狼群を討うつ

119

第五章 目標マダガスカル

153

第六章 新たなる力

207



インド洋周辺図





連合艦隊西進す 1

日独開戦

序章

インド洋は荒れ模様だった。

強風が絶えず吹き付け、海面は白く染まっている。各艦のメインマストに掲げられているホワイト・エンサイン——大英帝国海軍の軍艦旗は、どれも激しい音を立て、ひっきりなしにはためいている。マストからちぎり取られ、吹き飛ばされてしまうのではないかと思えるほどだった。

「最新鋭戦艦ともなりますと、この程度の悪天候ではびくともしませんね」

連絡将校として、英本国艦隊旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」に乗艦している加倉井憲吉日本海軍中佐は、航海参謀のジョン・キャンベル中佐に話しかけた。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は、一昨年——一九四〇年一月から竣工し始めた大英帝国の最新鋭戦艦キング・ジョージ五世級戦艦の二番艦だ。

全長二二七・一メートル、最大幅三四・二メートル、基準排水量三万八〇三トンの艦体は、長く帝国海軍最強の戦艦として君臨した「長門」「陸奥」と比較しても遜色ない。

鋼鉄製の巨体は、真正面から三角波にぶつかられても、さほど動揺しない。

周囲を航行する駆逐艦が、激しいピッチングやローリングを繰り返しているのとは対照的だ。

「本艦はいいが、『キング・ジョージ五世』と『デューク・オブ・ヨーク』が心配だ」

参謀長のフレデリック・サリンジャー少将が顔を曇らせた。

キング・ジョージ五世級戦艦の一、三番艦に当たる両艦は、「プリンス・オブ・ウェールズ」の右前方と左前方に展開している。

「プリンス・オブ・ウェールズ」同様、高波を受けても平然としているが、その歩みは遅い。

「キング・ジョージ五世」は右舷中央に、「デューク・

オブ・ヨーク」は左舷後部に、それぞれ雷撃を受け、水線下に破孔を穿たれているのだ。

三万八〇〇トン以上の基準排水量を持つ戦艦が、魚雷一本程度で沈むことはないが、被雷箇所到大波がぶつかったら、周囲の艦内隔壁が水圧によって破られる恐れがある。

「現在位置は、大ニコバル島よりの方位二五〇度、五〇浬です。いざとなれば、『キング・ジョージ五世』と『デューク・オブ・ヨーク』は、浅瀬に座礁させる手もあります」

「それは、最悪の手だ」

キャンベルの一言を受け、司令長官のジェームズ・ソマーヴィル大將がぼそりと言った。

少し考えてから付け加えた。

「なにせ我が艦隊には、補充が利かぬからな」

「『キング・ジョージ五世』も『デューク・オブ・ヨーク』も、そこまで切羽詰まった状態ではありません」

「プリンス・オブ・ウェールズ」艦長ジョン・リーチ大佐が言った。

リーチは「プリンス・オブ・ウェールズ」が竣工したときから、一年近く艦長職を務めている。

キング・ジョージ五世級は、この程度の天候に負ける艦ではない——そんな自信を感じさせた。

だが、英本国艦隊の敵は、インド洋の悪天候だけではなかった。

艦隊が一〇浬ほど前進したとき、艦橋の電話が鳴った。

リーチ艦長が数語を交わした後、ソマーヴィルに報告した。

「対水上レーダーに反応がありました。敵味方不明艦約二〇隻が、方位二五〇度、二五浬に探知されたとのことです。うち三隻は反射波が大きく、戦艦と推定される、と伝えております」

ソマーヴィルやサリンジャーらは顔を見合わせた。前方に出現したのであれば盟邦の艦隊と推測され

るが、後方に出現したのであれば、敵と断じる以外にない。

英本国艦隊は、枢軸国の艦隊に捕捉されたのだ。

「空母の艦上機で迎撃しては？」

「無理です。この天候では、発艦できません」

首席参謀アーサー・コリンズ大佐の具申を、作戦参謀ヘンリー・ハミルトン中佐が否定した。

空母も激しく動揺している状況下で、無理に発艦させれば、艦上機と搭乗員の命を無駄に捨てるだけだ——ハミルトンの怒ったような顔は、無言の内にそう主張していた。

「空母に二個駆逐隊を付け、避退させよう。後方の敵艦隊は、本隊が引き受ける」

ソマーヴィルが断を下した。

本国艦隊が伴っている六隻の空母のうち、四隻のイラストリアス級は、貴重な正規空母というだけではない。

大英帝国にとって、最も重要な人々が乗艦してい

るのだ。

「プリンス・オブ・ウェールズ」の通信室から電波が飛び、六隻の空母が速力を上げる。

本隊との距離が開き、波浪の彼方へと消えてゆく。

「キング・ジョージ五世」より信号。『我を省みず避退されたし』。『デューク・オブ・ヨーク』も、同じ信号を送っています」

今度は、信号員が報告を上げた。

被雷した二隻の戦艦からは、「出し得る速力一八ノット」との報告が届いている。

この二隻を伴えば、本国艦隊も一八ノットでしか行動できない。

「キング・ジョージ五世」と「デューク・オブ・ヨーク」の艦長は、味方の足を引っ張りたくないと考えたようだ。

「両艦に返信。『我に避退の意志なし。いざ、共に戦わん』」

ソマーヴィルは、ほとんど間を置かずに返した。

戦友を見捨てるつもりはない。その意を、はっきりと示したのだ。

「長官、私に通信室への立ち入りを許可していただけませんか？」

加倉井は一歩前に進み、申し出た。

「どうするのかね？」

「友軍に来援を要請します」

ソマーヴィルの問いに、加倉井は即答した。

現在、英国領マレー半島やアンダマン諸島には、英国との合意の上で、日本海軍の航空部隊が進出している。

来援要請の報告電を打てば、最も近い航空基地にいる部隊が駆け付けて来るはずだ。

「しかし、日本は——」

コリンズ首席参謀が声を上げかけたが、

「許可しよう。よろしく頼む」

ソマーヴィルは即断した。

加倉井は通信参謀のマイケル・ノーランド少佐に

伴われ、通信室に足を運んだ。

「我、敵艦隊ノ追撃ヲ受ク。至急来援請フ。位置、『大ニコバル島』ヨリノ方位二五〇度、四〇哩。大英帝国本国艦隊。発信者ハ日本海軍中佐加倉井憲吉ナリ。一二〇五」

と、通信員に打電させた。

現地の司令部が発信者名を見れば、在英大使館付武官補佐官が打電した電文であると気づくはずだ。ただし、海軍省が現地部隊に加倉井の名前と身分を知らせてくれていれば、だが。

打電を終えた加倉井が艦橋に戻ると、

「敵が距離を二〇哩まで詰めてきた」

キャンベル航海参謀が、状況を報せた。

加倉井は、脳裏でざっと計算した。

距離二〇哩は、メートルに換算すると三万七〇〇メートルだ。

すぐには、砲撃戦は始まらないと見てよいが、来援が間に合うかどうかは分からない。

「敵艦隊より入電。停船せよ、と伝えています」

「返信の要なし」

「プリンス・オブ・ウェールズ」通信長ジョフリー・ブレトンウッズ少佐の報告に、ソマーヴィルは躊躇なく答えた。

英本国艦隊は、一八ノットの艦隊速力で航進を続けている。

後方からの砲撃はまだないが、「プリンス・オブ・ウェールズ」の対水上電探は、次第に近づいて来る敵艦の影を捉えているはずだ。

「敵艦隊より第二信。『貴艦隊の行動は、講和条約に違反するものである。速やかに停船し、投降せよ。全乗員の生命を保証する』」

ブレトンウッズが新たな報告を送つて来た。

ソマーヴィルの答は変わらない。「返信の要なし」だ。

英国海軍の提督には頑固者が多いというが、ソマーヴィルも例外ではない。ひとたび決定したことは、

よほどのことがない限り変更しない。

相手が祖国を蹂躪した敵国となれば、なおのこ

と意志を変えるつもりはないであろう。

（枢軸国の艦隊は、英本国艦隊を脱走者として扱うつもりらしいな）

加倉井は、敵の意図を読み取った。

電文は、講和条約違反を咎めている。

「本国が降伏した事実を認めようとせず、艦を奪つて脱走した犯罪者の集団」

というのが、彼らの認識なのだ。

英本国艦隊は、彼らにとり、既に「交戦相手国の艦隊」ではない。

「お前たちは脱走者であり、犯罪者なのだ」と思い知らせようとしているのだろう。

現地時間の九時三〇分を回ったとき、

「後方に敵艦！ 戦艦らしき大型艦三。中小型艦一〇以上！」

「敵艦隊より入電！ 『最後の警告を送る。停船せ

よ。しからざれば砲撃す』」

後部指揮所と通信室から、前後して報告が飛び込んだ。

「戦闘準備。各艦、後部の主砲塔にて応戦せよ」

ソマーヴィルが、凜とした声で下令した。

「T字を描いては？」

「避退を優先する」

サリンジャーの具申を、ソマーヴィルは一言の下に却下した。

「プリンス・オブ・ウェールズ」の通信室から各艦に命令電が飛び、前を行く「キング・ジョージ五世」「デューク・オブ・ヨーク」の第三砲塔が旋回・俯仰する様子が見える。

両艦とも浸水によって縦傾斜が狂っており、射撃精度を欠いているが、黙って打ちのめされるつもりはないのだ。

「目標、敵一番艦。射撃準備！」

「プリンス・オブ・ウェールズ」のリーチ艦長も、

射撃指揮所に指示を送る。

艦橋からは死角に入っているが、航続する二隻の巡洋戦艦「リナウン」「リパルス」も、後部の主砲塔を旋回させ、後方の敵艦隊に狙いを定めているはずだ。

「砲術より艦橋。敵はフランス艦。戦艦はリシュリユー級、及びダンケルク級と認む」

「プリンス・オブ・ウェールズ」砲術長のジェラルド・ロウ中佐が報告した。

「接収した艦を投入して来たか」

コリンズが唸り声を上げた。

一昨年六月、フランスがドイツに降伏したとき、講和条件の一つとして「フランスが保有する軍艦の接収」を吞まされている。

後方に出現したフランス艦に乗艦しているのが、ドイツ人かイタリア人かは分からない。

「リシュリユー」や「ダンケルク」ではなく、ドイツかイタリアの名が、新たな艦名として与えられて

いるであろう。

「敵艦発砲！」

後部指揮所から、緊張した声で報告が上げられた。

（始まった！）

加倉井は、我知らず身体がこわばるのを感じた。

三年前——昭和一四年九月一日の開戦以来、戦争は専ら欧州と北アフリカで繰り広げられていた。

だが今、戦火とは無縁だったインド洋の北東海上で、フランス戦艦が砲門を開いた。欧州の戦争は、アジアに拡大したのだ。

それは同時に、日本もこの戦争に巻き込まれてゆくことを意味していた。

「長官、反撃を！」

「戦艦、巡戦、射撃開始」

サリンジャーの具申を受け、ソマーヴィルは下令した。落ちていた、重みのある声だった。

「艦長より砲術。射撃開始！」

リーチが口ウ砲術長に命じるや、轟然たる砲声が

後部に轟き、加倉井は後ろから突き飛ばされるような衝撃を感じた。鋼鉄製の艦橋が、しばし震えた。

キング・ジョージ五世級戦艦の主砲は、三五・六センチ四連装砲塔二基、同連装砲塔一基。四連装、連装各一基を前部に、四連装一基を後部に、それぞれ配置する。

それらのうち、後部の第三砲塔四門が火を噴いたのだ。

「プリンス・オブ・ウェールズ」よりやや遅れて、「キング・ジョージ五世」「デューク・オブ・ヨーク」の後部に、発射炎が閃く。

褐色の砲煙が湧き出し、砲声が「プリンス・オブ・ウェールズ」の艦橋まで伝わって来る。

「リナウン」「リパルス」射撃開始」

後部指揮所から報告が届く。

二隻の巡洋戦艦が、後部の三八センチ連装主砲を発射したのだ。

砲声が収まるや、敵弾の飛翔音が聞こえ始める。

「プリンス・オブ・ウェールズ」の周囲の大気が鳴動し始め、急速に拡大する。

轟音は、艦の頭上を前方へと通過した。

「プリンス・オブ・ウェールズ」の正面で、海面が大きく盛り上がった。艦橋のみならず、メインマストをも超えるであろう海水の壁が出現し、「プリンス・オブ・ウェールズ」の正面を塞いだ。

艦首が壁を突き崩し、大量の海水が激しい音を立てて、主砲塔の天蓋や艦首甲板を叩く。甲板上に川のような流れができ、海水は左右両舷から海に帰ってゆく。

(斉射か)

加倉井は、フランス戦艦の主砲配置を思い出している。

リシユリユー級、ダンケルク級は、四連装の主砲塔二基を艦の前部に配置している。

敵に艦首を向けたままで、斉射が可能なのだ。

これに対し、英戦艦は後部の主砲しか使えない。

火力面での不利は否めない。

「リナウン」「リパルス」の周囲に弾着。直撃弾なし！」

「我が方の砲撃、命中弾なし！」

後部指揮所からの報告が届くや、再び艦の後部に巨大な砲声が轟く。

姉妹艦の「キング・ジョージ五世」「デューク・オブ・ヨーク」の後部にも砲煙が湧き出し、「リナウン」「リパルス」も後部一基二門の三八センチ主砲を放っている。

敵戦艦の第二射弾が、轟音と共に飛来した。

今度は全弾が、「プリンス・オブ・ウェールズ」の左舷側海面に落下し、見上げるような水柱を奔騰させた。

後方からも、爆発音は伝わって来ない。「リナウン」「リパルス」も、直撃を免れたようだ。

「我が方の砲撃、命中弾なし」

忌々しげな声で、報告が上げられる。

「プリンス・オブ・ウェールズ」も、「リナウン」「リパルス」も、後部の主砲だけで直撃弾を得るのは難しいようだ。

「プリンス・オブ・ウェールズ」は、第三射を放つ。轟音と共に四発の三五・六センチ砲弾が放たれ、二隻の姉妹艦、後続する二隻の巡戦も旗艦に倅う。

入れ替わるようにして、敵戦艦の射弾が「プリンス・オブ・ウェールズ」に殺到して来る。

敵弾の飛翔音が、頭上を圧して他の音をかき消す。それが急速に拡大し、極限に達したかと思うと、「プリンス・オブ・ウェールズ」の右舷側海面に巨大な水柱が突き上がる。

弾着位置は第二射より近い。水柱の一本は舷側を擦って飛沫を散らしている。

(次あたり、直撃を喰らうかもしれん)

加倉井が不吉な予感を覚えたとき、

「右六〇度に機影！」

艦橋見張員が叫んだ。

加倉井は右舷側の窓に駆け寄り、空を見た。

見覚えのある機体が、英本国艦隊に接近して来る。葉巻形の胴、長い直線的な主翼、その前縁に突き出した太いエンジン・ナセル。

一式陸上攻撃機だ。

来援要請を受けた第一一航空艦隊の司令部が、最寄りの航空基地にいる部隊に出撃を命じたのだらう。一式陸攻は、「プリンス・オブ・ウェールズ」の右舷上空で、次々と左旋回をかけ、艦の後方へと向かった。

後部見張員が、歓喜の声で報告を上げた。

「日本機の編隊、敵艦隊に突入します！」

第一章

落日の英本土

1

一九四二年一月四日早朝、大英帝国陸軍第四歩兵師団のピート・ロバーツ兵長は、本土南岸のヘイスティンクスに築かれた防御陣地で、上官や戦友たちと共に、沖合の海面を見つめていた。

「ドイツ軍は、いつ上陸して来てもおかしくない」この噂は広く行き渡り、国民は不安の中で過している。

前年九月より始まったイギリス本土に対する大規模な航空攻撃——「第二次英本土航空戦」と呼ばれる戦いで、イギリス空軍はイングランドの制空権を失った。

ドイツ空軍は、一九四〇年八月から九月にかけて行われた「第一次英本土航空戦」の失敗を考慮して、「イギリス空軍の撃滅」を第一目標とし、リーダーサイト、飛行場、貯油施設、更には航空機の生産工

場的を絞って、徹底的な爆撃を行ったのだ。

イギリス空軍も、第一次バトル・オブ・ブリテン時以上に奮戦したが、本土防空に不可欠の眼となるレーダーを破壊されたため、防空戦闘は後手に回ることが多くなった。

更に、中近東からイギリス本土に石油を運んで来る油槽船が多数、Uボートに撃沈されたことで、燃料も逼迫した。

一二月末までにイングランドの航空基地は壊滅状態となり、イギリス空軍の残存機はスコットランドに後退した。

イングランドの制空権は、ドイツ空軍に握られたのだ。

以後、イギリス国民は、本土が戦場となる恐怖に怯えている。

「フランス、ベルギー、オランダにドイツ軍が集結している」

「国王陛下とその御一家は、既にロンドンから避難

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。